Yさん宅のあまりの被害の大きさに涙ぐむボランティアさんも

力を合わせて汚泥を外に排出

サテライトでスタッフの話を聞く参加者

一行は現地スタッフから活動内容や注意事項を聞いた後、8班に分かれて徒歩で活動先へ。安全に作業ができるよう、ホコリや泥よけ用のマスクとゴーグルを顔につけ、長靴に手袋というスタイルで準備は万全。今回は津波被害を受けた個人宅での家財道具の片づけ、汚泥やがれきの除去作業が主な活動です。

津波に流され土台だけが残った家々、住宅に突っ込んだままの船や自動車。折れ曲がった信号機、倒れた電柱…。震災から1ヶ月半が経過していても、町中でこんな風景が広がっています。この地域は未だ電気・ガス・水道も復旧していません。道路のあちこちに陥没や冠水が見られ、そんな中を歩くボランティアは、目の当たりにする光景に言葉を忘れたかのように、みんな押し黙ったまま。サテライトで渡された地図を頼りに活動先のお宅を探して歩きますが、目印になるはずの建物が流されていたり、家々の表札がわからなくなっているため、活動先を見つけ出すのも一苦労です。

ある班は、庭の汚泥の除去を依頼されたMさん宅にようやく到着。樹木や庭石の間に積み重なった泥やがれきを手でていねいにかき出し、土のう袋に詰めては外まで運び出す作業を黙々と繰り返していきます。午後からは他の2班も作業に合流。庭は徐々にきれいになっていきました。

その様子をじっと見ていたMさん。「家の中が津波で滅茶苦茶になって、実は見るのもつらくて片づける気になれなかったんです。でも皆さんの熱心な働きぶりを見ているうちに、私もがんばらねばと少し勇気が出てきました」と話されます。その言葉を聞いて、ボランティアたちはホッとひと息。慣れない作業の疲れも、どこかに吹き飛んでしまったようです。

積もった泥の中から、母子手帳をみつけ出す

70代のYさん宅でも泥だし作業が続いています。津波が押し寄せ1階部分が水没し、その中を潜って外に出て、2階まで泳いで難を逃れたというYさん。室内は押入れや本箱の中まで泥がびっしり詰っていました。食器や本などの家財道具を外に運び出し、泥やがれきをかき出していきますが、あまりの惨状にみんな言葉もありません。

同じような高齢のご夫婦が暮らすFさん宅では、居間に掛けられた日めくりカレンダーが、震災の起こった3月11日のまま。それに気づいた中学校教諭の永井敬さんは「ご夫婦にとってはあの日から時間は止まっているのかもしれません。日めくりを毎日めくる。そんな当たり前の日々が早く戻ってきてほしいと願わずにはおれません」

一方、Kさん宅では玄関前に積もった泥の中から、母子手帳をみつけ出し、とても喜ばれました。「でも、笑顔のなかにも、大切なものが泥まみれになってしまったという悲しみも伝わってきて…。つらい毎日を過ごしておられることに胸が痛みました」と、母子手帳を手渡した佐藤裕美さん。

どの班も、泥やがれきを取り除く力仕事の連続。一輪車やシャベルを使うのは初めてという人も多く、汚泥の重さに悪戦苦闘しながらの作業が続きます。そんなボランティアのひたむきな姿に、依頼者の皆さんは「元気づけられた」、「本当にありがたい」と、お礼を言ってくださいます。けれども、きれいにできるのは、どのお宅でもほんの一部。圧倒的にボランティアの数が不足しているとみんな痛感していました。

夕方4時、活動を終えてバスで宿舎へ。車中では「初日で意気込みすぎて、後半は息切れ気味になってしまった」と反省する声も。班ごとに、休憩や食事時間を取りながら作業をしましたが、食事は各自が持参したパンと水だけという人がほとんど。明日以降、ペース配分に気をつけながら活動することが確認されました。

ペットの発見に、思わず歓声と拍手が

そして翌日。この日も班に分かれての活動です。

店舗も住居も津波で大きな被害を受けたS理容所。少し落ち